

はできない。人間は生き、人間は墮（お）ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない。

戦争に負けたから墮ちるのではないのだ。人間だから墮ちるのであり、生きているから墮ちるだけだ。だが人間は永遠に墮ちぬくことはできないだろう。なぜなら人間の心は苦難に対して鋼鉄の如（ごと）くでは有り得ない。人間は可憐（かれん）であり脆弱（ぜいじゃく）であり、それ故（ゆえ）愚かなものであるが、墮ちぬくためには弱すぎる。人間は結局処女を刺殺せずにはいられず、武士道をあみださずにはいられず、天皇を担ぎださずにはいられなくなるであろう。だが他人の処女でなしに自分自身の処女を刺殺し、自分自身の武士道、自分自身の天皇をあみだすためには、人は正しく墮ちる道を墮ちきることが必要なのだ。そして人の如くに日本も亦（また）墮ちることが必要であろう。墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない。政治による救いなどは上皮だけの愚（ぐ）にもつかない物である。

（新潮文庫）

敗戦と価値観の崩壊 一吉本隆明

わたしは、敗戦のとき、動員先からかえってくる列車のなかで、毛布や食糧を山のように背

負いこんで復員してくる兵士たちと一緒にあったときの気持ちを、いまでも忘れない。いったい、この兵士たちは何だろう？ どういう心事でいるのだろうか？ この兵士たちは、天皇の命令一下、米軍に対する抵抗もやめて武装を解除し、また、みずからの支配者にたいして銃をむけることもせず、嬉々として（？）食糧や衣料を山分けして故郷にかえってゆくのは何故だろう？ そういうわたしにしても、動員先から虚脱して東京へかえってゆくのは何故だろう？ 日本人というのはいったい何という人種なんだろう。

兵士たちをさげすむことは、自分をさげすむことであった。知識人・文学者の豹変（ひょうへん）ぶりを嗤（わら）うことは、みずからが模倣（もほう）した思想を嗤うことであった。どのように考えてもこの関係は循環して抜け道がなかった。このつきおとされた汚辱（おじょく）感のなかで、戦後が始まった。

（『思想的な毛の子』『吉本隆明全著作集』5 勁草書房）

日本近代への反省

なぜ、日本でだけ、内部世界を確立し、たちつづけるために至難の持続力が必要とされるのであろうか。そして、戦争期に、近代的自我も、人道主義も、共産主義も、もろにくずれていったのは、なぜであろうか。高村の崩壊の過程には、ひとつの暗示があるとおもう。それは、

近代日本における自我は、内部にかならず両面性をもたざるをえない、ということである。それは一面では近代意識の積極面である主体性、自律性をうけつぐとともに、近代のタイハイ面、ランジュク性をよぎなくうけつがざるをえない。他面、かならず、自己省察の内部検討のおよばない空白の部分を、生活意識としてのこしておかなければ、日本の社会では、社会生活をいとなむことができないのだ。おそらくこの両面性は日本の近代社会の矛盾した両面性にアナロジカルである。これから動乱期の現実のはげしい力は、この内部の両面性にくさびをうちこむとともに、社会が要請してくる倫理性は、近代のタイハイ面を否定するようにはたらし、同時に、生活意識としてのこされた内部の空白の部分を、日本的な庶民の生活倫理から侵されざるをえなくなる。いわば、内部が、思想的な側面と、生活意識の側面から挾撃（きょうげき）されるというのが、動乱期の日本的自我につきまとう宿命に外ならなかった。戦争期に、日本的な近代意識のタイハイ面の批判者としてあらわれたのは、日本的ファシズム、民族主義であり、実生活意識から批判者としてあらわれたのは、日本の庶民そのものである。

（『高村光太郎』『吉本隆明全著作集』8）